

も独自の意義を有する成果として明快に描いたことによって、今後の研究が顧みるべき新たな視点を示していると思われる。というのも、仮にアウグスティヌスを rationalism の伝統のうちに据えるという著者の主張が妥当であるとするならば、その自由論についての従来解釈はその前提から問い直されることになるからである。更に本書で呈示された視点は、キケロ、あるいはストア派の行為論との比較に際して示唆的であり、それによって、アウグスティヌスの自由論を、古代哲学の系譜に連なる思索としてよりよく理解するための展望を我々の前に開くのではないかと思われる。

Brian, Stock: *AUGUSTINE THE READER, Meditation, Self-Knowledge, and the Ethics of Interpretation*

The Belknap Press of Harvard University.

Press 1996 p. 463

林 明 弘

われわれにとって、アウグスティヌスは多くの著作を残した書き手であるが、さまざまな書物の読者でもあった。著者はアウグスティヌスをこの観点から見る。アウグスティヌスは誰にもまして自分の著作の読者であった。彼は読者の反応を考えながら書くだけでなく、長期にわたって一つの作品を書いている最中に、すでに読まれた部分についての誤解を聞き、それを解くために書くこともあった。晩年の「再論」で行なったようなことは何度もあったのである。

そしてもちろん聖書の読者であった。そしてこれは聖書の場合に限らないのであるが読者であることは同時にその探究者でもあり、解釈者でもあった。しかし聖書ほどアウグスティヌスが真剣に探究し、解釈した書物は他にはない。ヴェルギリウスを読んで涙を流し、キケロの「ホルテンシウス」を読んで知恵の探究に目覚め、アリストテレスの「カテゴリアエ」を読んで容易に理解し、新プラトン派の書物を読んで内面への道を学ぶという異教の書物の読書体験はさまざまな影響を与えながらアウグスティヌスのなかで聖書を読むことへと収斂していった。

しかしながらアウグスティヌスは単に読者であっただけではない。自分が読んだ聖

書について聴衆に説教しなければならないに立場あったと同時にある箇所を解釈をめぐって論争しなければならないこともあった。聖書の正しい読み方についても考えなければならなかったのである。それだけではない。読み書きのできない聴衆についてもアウグスティヌスは配慮しなければならなかった。それは文字によってではなく、音声によってだけ聖書の言葉に触れることのできる人たちであった。そのような人たちをどうやって「物的なものを通して非物的なものへと」導くかということもアウグスティヌスの重要な関心事であった。

音声によってしか聖書の言葉に触れることのできない人たちには音読してやるよりほかはないが、アウグスティヌスは自分の聖書解釈の方法において決定的な影響を受けたアンブロシウスについて、彼が黙読しているのを見て驚いた体験を述べている。何を読んでどう解釈するかという問題だけでなく、どのような読み方をするか、大勢の前で音読するか一人で部屋にこもって黙読するかも読書においては大事な条件である。外なる声と内なる声、沈黙において行なわれる祈り、外においては沈黙していても内においては叫んでいる等々はアウグスティヌスがしばしば扱うテーマである。そして外において発せられる音声は時と共に過ぎ去り、記憶に残り、精神がその全体を捉えることができるということはアウグスティヌスの時間論、記憶論のテーマへとつながっていく。

「読書」の意味を広く取るならば、それは単に書物を読むことだけではない。神が創造した世界そのものも神の意志の現れであるから、世界を神によって書かれた書物（アウグスティヌスの比喩を使えば「巻き物」Conf., 13, 15）と考えるならば、自然を探索することも読書である。同様に過去の自分について起こった出来事を回想し、それが現在の自分から見て現在の自分にいかなる意味を持っていたのかを解釈することも広い意味での読書である。そして何にもまして、神に向けて神の似姿として創られた人間の魂のなかに書かれているはずの神の文字を解説すること、外の世界でなく自己の内に神を探究することこそ、聖書の探究と並んでもっとも重要な読書である。なぜならそこには神の三位一体と人間精神の三一性との（不類似のほうが大きい）類似性があるからである。

著者はこのように「物的なものを通して非物的なものへ」「しるしを通してものへ」という仕方でも「神と魂を知ろう」とするアウグスティヌスを広い意味での読者としてとらえ、以上述べたさまざまな観点からアウグスティヌスの著作を解釈してい

る。

本書は全体が9章からなり、第1～第4章が第一部、第5～第9章が第二部となっており、第一部では『告白』の1巻から9巻までを扱い、アウグスティヌスの少年期からカシキアクトムに到るまでの読書の場面を論じる。第二部では、前述のテーマを年代順、著作別に論じていく。すなわち、第5章では回心直後の書簡とカシキアクトム対話編、第6章で *De Dialectica*, *De Magistro*, *De Utilitate Credendi* 第7章で *De Catechizandis Rudibus*, *De Doctrina Christiana*, 第8章で *Confessiones* 10, 11 巻第9章で *De Trinitate* を論じている。二部で扱われるテーマについては個々に多くの研究があるので、評者にとって興味深く思われた第一部の第3章について以下に紹介してみたい。

『告白』の中でいわゆる「読書」の場面としてもっとも有名であり、最初に思い出されるのは8巻のミラノの回心における「取って、読め」の場面であろう。これは確かにクライマックスの場面ではあるが、著者の解釈によれば、アウグスティヌスはそこに至るまでの間に、非常に巧妙かつ周到な伏線を敷いており、そこで読書が重要な役割を果たしているという。6巻でアンブロシウスの黙読する姿を見て驚き、聖書の霊的な解釈法を学んだことが述べられた後で、7章から9章で語られるアリビウスのエピソードが8巻のための「本番並みのリハーサル」である。そこではアウグスティヌスが教室でテキストの解釈をしているのを誤って自分のことを言っているのだと解して態度を改めるアリビウスと、読書に熱中している間に窃盗犯の嫌疑を受けるアリビウスのことが語られる。これはアリビウスを8巻でアウグスティヌスの回心の唯一の証人として登場させるための準備である。

ここまで準備した後アウグスティヌスは直ぐに回心を語るようなことはしない。ちょうど6巻で(13巻)全体の半分が終わり、7巻は中間点にあたる。そこでアウグスティヌスは7巻では外的な出来事についてはほとんど何も語らずにもっぱら新プラトン派の書物を読んだことと絡めて自己の精神的遍歴を語る。その後8巻でそのような精神的遍歴を持った自分の悩みを打ち明けようとシンプリキアヌスを訪れたことを述べる。

8巻では三つの回心について語られる。シンプリキアヌスがヴィクトリヌスの回心について語り、ポンテキアヌスが庭園で二人の行政監察官が回心した話を語り、アウグスティヌスが自分とアリビウスが回心した話を語っている。最初のヴィクトリヌ

スの場合、彼は聖書を熱心に読み、あらゆるキリスト教の書物を熱心に研究し、修辞学を教えていた。二番目の二人の行政監察官の場合、二人はたまたまアントニウスの生涯について記した書物を目にして、それを読み、感激して「突然」回心した。（このふたりのケースはアウグスティヌスとアリピウスの場合とよく似ている）その後アウグスティヌスは7章からポンチキアヌスの話を聞いてから自分がどういう精神状態になったかを書いて、内面の葛藤の末、回心したことを述べる。読者はミラノの回心がその前に語られた二つの回心を知った上でそれらの累積的な結果をふまえてアウグスティヌスの回心を読まねばならない。読者だけでなく、それらの回心を報告している語り手、シンプリキアヌス、ポンチキアヌス、アウグスティヌス（この最後の場合だけ、報告者がアウグスティヌスで、その証人がアリピウス）が段階的により外的な証人からより内的な証人へと変わっていることに注意しなければならない。アウグスティヌスは文体のレベルから聴衆（読者）の問題へと関心を変えることによって後期古代の物語りの手法を変革したと著者は歴史的な評価を下している。

Werner Beierwaltes:
Eriugena. Grundzüge seines Denkens.

Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann 1994. 364 S.

今 義 博

本書はエリウゲナの思想に内在する思惟の原動力の基本的諸特徴を鋭く抽出し、その諸特徴の源泉史と影響史の射程を発見的に見渡しつつ、彼の独創的な思想の中に哲学にとって本質的な含蓄豊かな数々の思想財を発掘している。すなわち、一方ではエリウゲナの哲学の諸相を哲学史に位置づけ、他方では中世から、現代に至る神学、哲学、文学の諸局面がエリウゲナの拓いた地平の上にどのような連関をもって立っているかを示しつつ、彼の哲学の根本志向を洞察し、「力強く深い独創的精神」(F. Copl-eston)の動態を描写し、「壮大な形而上学的叙事詩」(E. Gilson)の体系と論理を浮き彫りにし、思惟の神秘の源に肉薄している。これほど深くかつ明解にエリウゲナ思想の構造と歴史的意義を浮き彫りにした研究はなかった。